

特集

緑蔭図書紹介

『カラマーゾフの兄弟』をめぐる父娘対話

石川 雄一(父)

石川眞佐江(娘)



父：僕は高二の時『罪と罰』に続いて『カラマーゾフの兄弟』に挑んだが、小説をストーリー展開の軽さと心地よさで楽しむ世俗的な人間にとっては、この長編は手に負えず、あえなく第二巻でリタイアした。五十年近くたって、亀山新訳の文庫本第一〜五巻(F・ドストエフスキー作 亀山郁夫訳 光文社

二〇〇六―七年)に再チャレンジした。宗教的対話が中心の第二巻でまたギブアップしたくなったが、何とか読破した。

娘：私も子ども時代読みかけて途中で挫折した。約

十五年の月日を経て、亀山新訳のおかげでついに読破することができた。成長してから、昔読んだ作品を読み返すというのもまた楽しい作業だ。以前感じられなかったことをそこに見出す。と同時に、子ども時代に感じたことを、もはや感じられない自分にも気づく。

父：ドストエフスキー(一八二一―一八八二)は異常な時代(帝政ロシア末期、社会主義の勃興とテロ頻発)に異常な体験(十八歳で父親が農奴に殺害される。二十八歳の時、社会主義運動で死刑宣告を受

け、銃殺直前に減刑され、四年間シベリアに流刑された)をした作家だ。

『カラマーゾフの兄弟』は彼の最後の作品(一八七九—一八〇)で、この長編は地主の家族における三日間の出来事、そして魂のダイテールを描いている。展開は極めてスローで、語り口も冗漫だ。しかしこの時間と空間の集中性、すなわち一瞬に一生以上の深い意味があるようだ。

見かけのテーマは父親殺しをめぐるミステリー、しかしその真実は亀山によると、ロシアの歴史が抱える矛盾と悲劇性ということだ。主な登場人物はカラマーゾフ家の父、長男、次男、三男、そして腹違いの子とされる下男、そして子どもたち全員が心のどこかで父の死を望んでいる。ドストエフスキーがかつて自分の父の死を望んでいたように。

キリスト教(ロシア正教)に基づく深い思索で「生と死」「神と子」「パンと石」、精神の自由の問題

を徹底的に検証し、神、自由、自然の力について登場人物に語らせている。

娘：ドストエフスキーが生きた時代には、作曲家P・チャイコフスキー(一八四〇—一八九三)がいたが、彼が描くロシアにはチャイコフスキーのようなロマン的な感傷性はほとんどない。

訳者の亀山によれば、ドストエフスキーと作曲家D・シヨスタコーヴィチ(一九〇六—一九七五)には、相通じるものがあるという。しかし、私がドストエフスキー作品を読む時、M・ムソルグスキー(一八三九—一八八二)を思う。ムソルグスキーは幼少期、母親からピアノの手ほどきを受け、十歳になるとペテルブルグの軍学校に入学し音楽教師のもとでピアノを学んだ。これ以降、正規の音楽教育を受けたことは生涯なく、彼は絶えず自己の音楽上の訓練の欠落への不安に悩まされたという。その後、近衛士官学校を経て近衛旅団に配属され、のちに

『ロシア五人組』で共にするポロデイン、バラキレフ、キユイなどに出会う。軍隊を離れた後、作曲に専念するようになるが、そのころから神経を患うようになり、神経の過労からくる抑うつ、倦怠などの症状に悩まされた。さらに、二十六歳の時に母親を亡くしてからアルコールに強く依存するようになり、一八七七年ごろから神経性の熱病や不眠症、うつ病などが悪化し、一八八一年に死去した。

ムソルグスキーと言えば、組曲《展覧会の絵》(二八七四)が知られている。大学院時代、この組曲に取り組んでいた私に、師匠のピアノリスト、青柳晋先生は「チャイコフスキーはトルストイだけど、ムソルグスキーはドストエフスキーだよ」と言った。そのとき、昔読んだL・トルストイの『戦争と平和』(一八六三—六九)『アンナ・カレーニナ』(一八七三—七七)そして、ドストエフスキーの『罪と罰』(一八六六)『白痴』(一八六八)の記憶

と、これまで聴き、演奏したチャイコフスキーの音楽、そして当時格闘していたムソルグスキーの音楽とが線でつながった。誤解を恐れずに言えば、トルストイの作品に流れるロマン的な哀愁、愛や生の賛美と、チャイコフスキーの音楽には共通点があるように思う。

父：名門の貴族の家に生まれ、貴族の目を通してロシア社会の変動を描いたトルストイと、死刑宣告、シベリア流刑、転向という異常な体験から、人間の生の根底にあるものを描いたドストエフスキーとの対比と重なってくる。

娘：ムソルグスキーの音楽は、人間の底辺をえぐるような土臭さに満ちている。この組曲は、当時のロシア社会の暗部や人間の姿を風刺しているかのようだ。有名なラヴェル編曲のオーケストラ版《展覧会の絵》はフランス的で瀟洒な、色彩感覚に満ちたものに変化を遂げているが、原曲のピアノ独奏版《展

覧会の絵》は、もつと暴力的で原初的な筆致の楽曲だ。たたきつけるような和音、深くえぐるような音使い、人間の最も深く、汚く、罪深い部分や社会の底辺でうごめく人々の悲哀、慟哭、恨みをも感じさせる。

父：修道僧である三男のアリョーシヤの信仰の揺らぎを克服する大地の力、すなわち死の力を克服する力がロシアの大地にあること（自分の魂の中の大地）、白い雪に覆われた土が、その生命力を取り戻す自然の力でよみがえりを果たすシーン、そしてアリョーシヤを取り巻く子どもたちが「カラマーゾフ万歳！」と叫ぶ最後のシーンも極めて印象的だ。娘：《展覧会の絵》の最終曲「キエフの大門」は人間の創造物である建築物を描いているはずなのに、そこに感じられるのは、人間の悲哀も喜びも争いのみ込み、すべてを超越して未来永劫、ただそこにあるロシアの大地を象徴しているかのようである。

人間の弱さを拒むのでも、許すのでもない。人間の営みにかかわりなく、変わり得ずそこに在る“もへの畏敬と、歴史の深さ、大地の雄大さ、世界の広さを感じさせる。『カラマーゾフの兄弟』のラストシーンとどこか重なってならない。

父：さて亀山新訳が驚異的なベストセラーとなった。今なぜドストエフスキーなのか、当時の混沌のロシアが今のロシア、いやグローバルゼーションの世界に通じているためか。プーチンのロシアでは共産主義の代わりとして、ロシア正教が庶民の帰属心、愛国心の源泉となつている。自分の生き方に確たる自信を失いつつある時代に生きる人にとって、神は大きな意味をもっているようだ。

ドストエフスキーは「信仰は大きな疑いを通してえられるもの」と言っているが……。

（石川雄一 横浜国立大学留学生センター元教授・

石川眞佐江 静岡大学教育学部助教）